

るが如く物質的遺物を以て、人類の過去を研究するなれば、廣義の史學の一分科と見る可く、狹義の史學は文書資料を以て、同じく人類の過去を研究するを目的とするなれば、其の旨とする所は一なり。されば此の両者が相依り相助けて、其の兩方面の研究を綜合して始めて、人類過去の研究を全うするを得可きや論なし。

考古學と史學との關係を説明するは、今更其の例の多きに著しむ可きも、平凡なる一二の例を擧ぐれば、かの筑前國志賀島に於いて發見せる漢委奴國王の金印は其の制式により漢代のものたるを知るも、後漢書の記事によりて、光武帝時代のものたるを明にし、當代彼我交通の事實を確ることを得たり又た奈良朝に於ける唐との交通は續日本紀等の記事によりて梗概を知る可けんも、奈良正倉院其他諸大寺に傳ふる古器物を俟ちて、始めて明確なる觀念を得べし。同様に支那と西域との交渉は、支那歴代の正史之を記すも其の乾燥なる記事をして一幅の活潑として吾人の目前に髣髴せしむるものは、スタイン、ペリオ、グリエンウエデル、ルコック諸氏及我が大谷光瑞氏等の探検の研究發見せる幾多の遺物に外ならず。

而かも茲に文書資料即ち文献の傳ふる所と、考古學的資料のよる研究と相背馳するが如き場合は實際に於いて其の例尠からず。是れ熟れかの研究上の誤謬あるを示すものなるが、斯る場合に於ける考古學者の態度は如何なる可き。此の重要な問題に關しては、吾人は後節考古學の研究を論ずるの際に詳述する所ある可し。

(第一章完)

支那歴遊記略(上)

文學博士 松本 文三郎

余輩は大正六年京都大學より佛教の遺蹟及び遺物研究の爲め支那へ出張を命ぜられ、同年八月一日本邦を出發し、約八十日の間を以て南北支那を跋渉した。で今に旅行中見聞する所を節録して、讀者の一樂に供することとする。

八月一日京都出發、同五日青島着。青島では軍司令部の厚意によつて戰蹟を案内せられ、又市内の圖書館や學校等を參觀した。獨逸が同地占領以

來僅か十八年にして、微々たる一寒村を變じて、
兎に角東洋屈指の植民地となすに至つた苦心と諸
種の經營とに關しては、實に驚くべきものがある、
特に其植林事業の如きは、大に吾人の參考に資すべ
きものであらう。が青島のことには就いては世上既
に詳細に記述したのもあり、又人の能く知る所
であるから此には一切之を略する。唯一事の此に
注意し置きたいと思ふのは、青島市の中央ともい
ふべき處に支那紳商の集まり造つた載德記念碑な
るもの、建つて居ることである。是れは支那人の
獨逸政廳に對する德政碑、即ち頌德表である。勿
論支那では德政碑なるものが至る所に存し、中に
は眞に人民が知府、知縣の德政に信服し造つたも
のもあらうが、動もすれば官吏が己れの履歴を飾
り、榮達を求むるが爲、私に自から石碑建造の
費用を辨じ、人民の名を以て斯かる碑を建てしむ
るものもあるといふ。獨逸人に對する載德碑は果

して其何れであるかを知らぬが、支那に於ける德
政碑の數多い中でも、外人に對するものとしては
恐らく是が唯一であらう。而して余輩は其眞の建
立者の孰れたるを問はず、獨逸人が支那人の取扱
方に於て甚だ巧妙にして、又能く支那人の心理を
理解して居ることを感ぜざるを得ないのである。
現に今日でも山東地方では常に日支親善を口にす
る日本人よりも、一面には洋鬼として恐れらるゝ
獨逸人の方が、支那人間に評判の宜いのは、遺憾
ながら事實であるといはなければならぬ。

青島滯在中、城陽の驛長矢田部氏が考古の癖を
有し、漢の不其城趾から發掘したる幾多の物品を
藏せらるゝにより、之を一覽するやう勧められ、
七日同氏を訪ひ、其所藏品を見、又同氏親しく古
の不其城趾なるものに案内せられた。今の即墨は
城陽の東北二十里にあるが、漢代の即墨は城陽驛
の附近で、其處が即ち彼田單が火牛の計を以て齊

の七十餘城を復し、燕の大軍に捷つた所だといふ。今でも其城壁の壞れた趾には、甌の破片が澤山に残つて居る。尙ほ其後同氏が自から蒐集せられた甌や壺や鼎等の主なるものを殆ど全部京都文科大學へ寄贈又は寄託せられたに就いては、此機會に於て深く感謝の意を表して措きたいと思ふ。

八月八日には青島を發し、青州雲門山に上つた。山は青州驛の南十里計の處にあり、寺を大雲寺といひ、石山の上に建つ。此には佛龕五所あり、隋唐年間に造る所である。五龕の内、向つて左端の二は隋代の作で、餘の三は何れも唐代の作らしい。記録によれば隋の開皇二年から仁壽二年の諸像があるといひ、又隋の開皇大業の造像少くとも數十あるとも傳ふるが、龕の佛像は多く破壊せられ、特に右方三龕の中、其左端のものは全部闕け、其他も全いものは殆んどない。五龕以外の小龕も少からぬが、是れ亦多くは既に破損せられて居る。

余輩の見得たものでは隋の開皇十八年及び十九年の造像、唐の開元十八年及び十九年の造像銘の存するのみである。龕は五代の時一度修繕されて居るが、今では左方の龕の前に新たなる堂が建てられ、容易に龕に登ることも出来ないやうになつて居る。其存する所の佛像は何れも隋唐の代表的のものといへぬが、併し明かに其特色を認め得られ、其一標本とするに足るものである。

八月九日青州發濟南着、十日長清縣靈巖寺に至る。靈巖寺は濟南から津浦鐵路により約二時間にして萬德驛に下車、是より車路約二十五里の處にある。此寺は緣起甚だ明かならず、晋宋の間法定禪師なるもの、開く所といふ。寺には千佛堂（大雄殿）なるものあり、堂の中央には觀音彌陀釋迦の三尊を安置し、周圍の壁には七八段を作り、高約五寸位の諸種の木像（坐像）を陳列す。其數千体ありといふを以て、俗に千佛堂と稱するのであ

る。木像には總べて新たに金箔を塗るによつて、甚だ古色を失つて居るが、本尊と共に何れも唐代の作なることは疑なきものゝやうである。千体の中今既に數十百体を失ふ、何人かに取去られたものであらう。支那に於て唐代の木像の存するのは余の目撃した所では唯此一寺である。古來木像は屢々造られて居るが、其質朽ち易く又可燃性を有するが爲め、何時しか皆消失して了つたのである。本寺の佛像も佛像としては唐代最上の作とは考へられぬが、唐佛の斯の如く多く一堂に集まつて居るといふのは亦他に比類稀なる所である。尙ほ此靈巖寺境内には彼至正元年の「日本國山陰道但州正法禪寺住持沙門邵元撰並書」といふ碑もあるのであるが、邵元の書いた碑は此以外にも至正五年の貢副寺長生供記比丘邵元撰といふのや、新燃玉佛殿記沙門邵元撰といふのや、又至正元年の少林寺息庵禪師碑といふのもあるといふ。

八月十一日萬德驛發曲阜の孔廟に參拜した。孔廟のことは此に詳説するを要せぬ、が「唐碑を訪はんと欲せば當さに秦に入るべく、先秦漢魏の諸碑を訪はんと欲せば當さに齊魯に遊ぶべし」ともいはれて居るが、齊魯の中では孔廟が恐らく其首たるものであらう。嘗に漢魏六朝の碑の林立して居るのみならず、唐宋以後の碑も亦決して少くない尙其通路左右の碑亭には歷代帝王の御製を刻した大石碑もあり、其一々の碑は何れも數十萬両を要したものと聞いては、實に驚かざるを得ないのである。大成殿は孔子の像を安置し、傍顔子曾子子思孟子の四輩と閑子等の十二哲を祀る所である。殿の高さ七丈八尺、横十四丈、縦八丈四尺、金碧燦爛たるものであり、殿前には十個の石柱が立ち直徑各三尺餘、皆蟠龍を刻してあり、實に雄大な建築たるを失はぬ。北京を始め其他支那各地に於ける文廟は何れも皆之を範とし之を摹し造つた所

で、其規模は到底曲阜のには及ばぬのみならず他の文廟には單に孔子や十哲等の位碑を置いてあるのみであるが、獨り此には其塑像を祀つてある此塑像に就いては濟南貴志氏の曲阜記には次の如くいふ。

康熙廿三年冬十一月康熙帝東巡して闕里に詣り、大成殿に登りて此塑像を瞻仰し、顧みて衍聖公孔毓圻に像の製作年代を問ふ。衍聖公之に對へて、魏の興和三年竟州刺史李暎始めて聖像を塑せりといふ。蓋し衍聖公の對は孔像製作の濫觴を擧げたるものにして、此塑像の年代を言ひしにはあらず。尙ほ史を按ずるに古神を祭るに尸ありて、未だ像なるものなし。祀像の事戰國以後に始まる。而して孔子謠像の濫觴は漢の孝景の時にあり、當時太守文翁なるもの成都に石室を作り、始めて孔子の像を刻む。其坐するや蹠を敎め後に向ひ、膝を屈し前に當る、七十弟子兩傍に侍せりとあるは是なり。後漢書蔡邕傳に靈帝光和元年に孔子及び七十二弟子の像を誦かむとあり。然るに塑像の濫觴に至つては魏の李仲璇に肇まると稱するも、興和二年同人の修孔子廟碑中に「修建容像固不自仲璇始矣」の句あるより考うれば、尙ほ疑問とすべき所あり。明の嘉靖九年凡て塑像は聖人を祀るの法に當れりとなし、遂

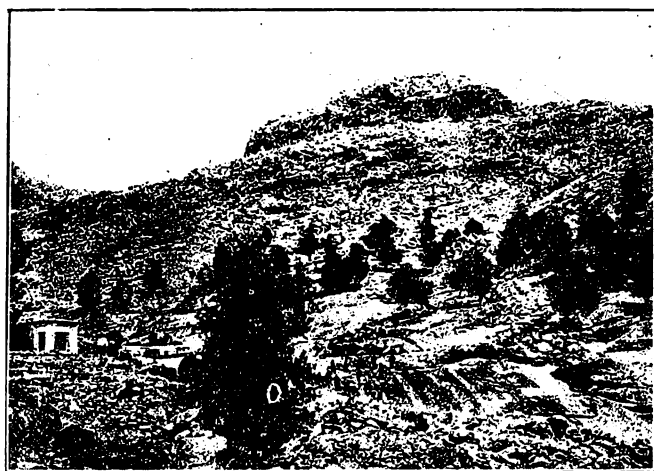
に天下に詔して孔子の塑像を撤廢し、易ふるに木主を以てせらる、其後復塑像崇拜せらるゝに至れり。

余輩は貴志氏の説の果して悉く當れりや否やを知らぬが、參考の爲め此に之を引いて置くのである。大成殿は壯大は壯大であるが、孔子の「飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣」といふやうな思想とは餘りに似合しからぬやうに思はれ、遺憾ながら善く其當時を追懷せしむる料とはならなかつたが、足一び孔林に入り、鬱々たる老樹の下蒼々たる草莽の間其墳墓を拜するに至つては、自から懷古の情の油然として生じ來るを禁じ得なかつたのである。孔子の墓は「舊記には冢の高一丈五尺、南北十步、東西十三步とあるが、其後増築せられたと見ね、今は高二丈餘周圍は百丈もある。形も舊記には馬鬣の如しとあるが今は普通の楯鉢形である。墓の四邊は楮、柞、柏其他の老樹鬱蒼として繁茂す、是れ皆孔子遺弟の各地方に散在し

たるものが、各其國の樹を齋らし來つて植ゐたので、最も珍奇の異木に富むといふ。墓は全面草に覆はれ、其草の多くは著草である。墓の南には石が立てられ、其面には大成至聖文宣王墓と刻してある。是れは元の武宗の追贈した所である。孔子の墓の西側には一小屋があつて、子貢廬墓處と刻する碑が立つて居る、是れ亦當時を追懷せしむる好資料である。

十二日曲阜驛を發し、泰安下車、直ちに泰山に上つた。泰山のことも世既に其紀行に乏しからぬから、今は一切之を略すこととする。が唯一つ此に述べて置かなければならぬのは、彼石經峪の事である。石經峪をは又俗に經石峪と稱する。泰山の中腹斗母宮より更に一急坂を躰ね、側の巖面に「漸入佳境」と題した所の附近から、少しく右崖を下り、溪流を涉れば、此に石山の緩き傾斜をなし、石の露出した大な面がある、此露出した花崗

石の面を人爲を以て摩削し、此に一字徑一尺斗の



石經 全 景

大字を以て金剛經全部を刻してあるので之を石經
峪と名づけたのである。刻面は石の罅間から流れ
出づる清水に潤さるゝのと、人の其上を往來する

のと、乃至は購買の頻りに拓本を作るとにより次
第に消磨し、今や金剛經一部約二千餘字の中、存
する所は僅に八百餘字に過ぎないのである。泰山
には石碑摩崖の類極めて多く、其字の之よりも更
らに大なるものや、其書の一層古いものは少くな
いが、其字數が多く、且つ刻面の廣いことに於て
は恐らく之を以て第一としなければならぬ。其書
者に就いては古來諸説あり、明の孫克宏の古今石
刻碑帖目錄には泰山の金剛經石刻は、俗に王義之
の書と傳ふるも、其筆法を察するに北齊の武平中
韋子深の書せる鄒縣の刻經と彷彿するを以て同人
の筆に成れるものならんとし、又錢竹汀の如きは
徂徠山映佛巖の大般若經と同じきを以て、同じく
北齊の武平中王子椿の書する所ならんといふ。石

面には署名のないことであるから、今何人とも容
易に判定し得ないが、其六朝人の筆たる秋毫疑を
容れない所であらう。

十二日泰山を降りて日暮濟南に歸り、翌十三日
濟南の馬將軍(名良)を訪ひ其拳法を見る。將軍の
言ふ所によれば支那の拳法なるものは幾多の派を
生じ、各其特色を有するが、其法を記すものは殆
んど之なきのみならず、今や次第に其迹を絶たん
として居る。で氏は各地よりして其各流の師を聘
し、之を子弟に教へ、其法をして後世に保存せし
むると同時に、他方には各派の長を採つて之を綜
合し、今日の教育に適するやうに編成し、我邦に
於ける兵式体操の如くに、之を中學若くは師範學
堂の教科目に編入せんと欲するのである。現に氏
は既に其新編拳法の初め三篇を出版し、今年第四
篇の出づるを俟つて成を告げんとすといふ。之を
一見するに其一部は我邦の柔道の如く、一部は柔

軟体操の如く、果して實用に供し得べきや否は判らぬが、運動の法としては稍其目的を達し得るもの、如くである。同日午後千佛山に上り、又古物陳列館を見る。千佛山は濟南城の南にあり、記録によれば北魏の正光四年以來の磨崖の造像ありといひ、又隋の開皇年間乃至唐の武徳以來の諸像もあると傳へられ、雲門山や玉函山の佛龕（隋代の作）等、共に山東に於ける造像碑石の名所であつたが、今や一の存するものなく、佛孫の如きは

何れも最近の作で、俗悪見るに堪わざるもののみである。現時は其風景の頗る佳なるを以て、都人士遊覽の場と化し、寺院は茶亭と變じ了つて居る。濟南の古物陳列所は規模尙ほ甚だ小なるものであるが、併し地方的陳列所中では頗る見るに足る。此には主として山東地方より發見せられた石幢佛像等の考古的物品を陳列してある。特に此陳列館内には先年日支兩國間の物議を惹起したとか稱す

る石闕畫像石の殘部を陳列し、尙ほ左の如き文を石に刻し、之と相並んで壁間に嵌入してある。

右漢畫像凡十石、甲至巳新從嘉祥蔡氏園中出土、其陽文庚字一方舊在縣中闕廟、三小方辛、得自肥城、壬與癸二不詳其所得之處、光緒三十四年先後爲日本人所購運過濟南、予以此石爲吾國古物、出資購留之、而泲懲出傳之人、漢代畫像存於山左者尙多、山崖窟壁間往々見之、然歷世既千有餘年、後之人其益愛護之也、宣統元年冬十月羅正鈞記

十四日濟南發天津一泊、十五日北京に入る。燕京にあつては唐の太宗が東、高麗を征した時、陣亡の將士の爲めに、貞觀十九年に造つたといふ法源寺即ち昔の憫忠寺や、前清雍正帝の潛邸であり、雍正即位の後章嘉呼圖克圖に賜はり、淨修の所となしたといふ雍和宮や、順治八年舊普淨禪寺に就いて作つた黃寺や、明の永樂の時姚廣孝の鑄る所で學士沈度が華嚴經一部を内外に鑄したといふ大鐘を以て有名である大鐘寺（鐘は高一丈五尺、徑一丈四尺、紐の高七尺、重八萬七千斤といふや、乃

至五塔寺、大慧寺等の寺院を始とし、元の世祖に召され、其帷幄に參じ劃策する所あつたといふ邸處機即ち長春真人の居た長春宮即ち今の白雲觀等を一見したが、此等は特に此に記すべき必要もなからう。要するに北支那は道家の信仰が今尙盛であつて、佛教は殆んど社會から消滅して居るといつても宜い。北京附近の寺院は地方のに比較すれば幾分修繕も出來、僧侶も少からぬが、眼に一丁字ないものが多く、多少なりとも佛學に通ずるものに至つては寥寥として晨星も翳ならぬのである。彼等に唯形式的に佛前の勤行を勉むるのみで、他人に對し布教するともなければ、讀經することもなく、唯恣々として寺房内に起臥するのみである。大寺にあつては龍藏乃至は明藏を備ふるものもあるが、多くは日常勤行に用ゐる經典か、若くは極めて普通の板經を藏するのみで、古寫古版の佛典の如きに至つては到底之を見るを得ない。余輩は

今回の旅行中其寺院たると書店たるとを問はず、古本佛典を探索したが、不幸にして何れにも之を發見し得なかつた。唯北京の一書店と長安の一骨董店とに於て宋版の佛典を見たのみである、而も北京のは日本より輸入したもので、南都某寺の印を捺しあつた。道家の盛なりといふも、畢竟は是れ現世利益の實利主義に本づくに外ならぬ。而も此道教の盛となつたのは、金から以後のことであり、殊に彼長春真人の元の世祖の寵を受けたことが、其大なる原因をなして居るらしい。現に白雲觀の如きも前清時代道士の宮室と關係を有したことから、外國公使館杯も之を利用せんが爲め、巨額の金を之に寄附して其修繕をなさしめたと聞いて居る、是れ宛も喇嘛寺の雍和宮が蒙古攘柔の政策の爲め、朝廷から年々支給を受け、能く其大を成したと同じである。で眞の宗教的意義は餘り多く此に發見することを得ないのである。

北京附近に散在する寺觀の中、天寧寺に關しては此に一言して置かなければならぬ。天寧寺は北京城南廣安門外にあり、始め北魏孝文帝の建つる所で、之を光林寺といつた。隋には弘業寺と稱し、唐の開元年間には天王寺と改め、金には大萬寺と呼び、明代今の名を改む。此に舍利塔一臺あり、高十三級、四周鐸を掛け、萬を以て數へる。此塔は隋の仁壽年間に出來たものであるが、其四方に天像や師子を彫造してある、何れも精巧であつて、隋代彫像の一標本とするに足るものであらうと思ふ。其天王の如きは凄氣人を襲ひ、久しく仰ぎ見るに忍びずと迄評されて居るが、遺憾ながら今は殆んど毀損せられ、僅かに其一面の稍完全に存するのみである。

北京にあつては尙ほ此等寺觀の外文廟にも參拜した、此には彼乾隆帝の立つる所十三經石碑がある、實に立派なものではあるが、其本文は朱熹集

註本を用ゐたのであるから、今より數百年以後ならば知らず、今日學術上には何等の裨益する所もなからう。尙此には碑屋と相並んで、版木が甚だ多く貯藏せられて居る、其何の書たるかは外部から判らぬが、地上に積重ねてあるのであるから、是れも久しからずして朽敗することであらうと思ひ、遺憾に堪へなかつたのである。舊大學の國子監には例の石鼓を新たに清朝時代に模造したものと共に保存されて居る。京師圖書館には彼四庫全書や、永樂大典の殘本や、敦煌出土の經卷を始めとし、宋元版等の貴重書が非常に多く貯藏せられて居る。是れは支那に於ける唯一の大圖書館であるのみなりとす、或點からは東洋第一といふことも出來やう。佛書に關しては餘り多くはないが、龍龜牛鑑の影宋鈔本や、宋槧本波羅密經、同景德傳燈錄殘缺本、同五燈會元、宋元槧本翻譯名義集、同宗門武庫、同碧巖集、元槧本三教平心論等の如

きは何れも皆他に容易に見るべからざるものと思ふ。彼敦煌出土の經卷の如きは極めて簡單な目録が出来て居るが、其内容を研究して居ないのであるから、未だ目録の体裁をも成して居ないのは甚だ遺憾にする所である。

燕京滯在中八月二十二日を以て房山行を企てた房山は又石經山と稱し、房山縣を去ること約三十里、京漢鐵路琉璃河驛よりは約五十里で、是れは房山縣を通過せず直ちに石經山に至るのである。寺は俗に西域寺と稱するが、雲居禪寺が其本名である。所謂石經なるものは雲居寺から約一里の山腹にあり、此處を小西天と名付ける。此に七洞一室あつて、石面に一切經を彫刻したものが收藏せられる。此石經は儒道佛を論せず、現存する支那石經中矩模の最も大なるものである。房山の石經は隋の靜琬法師なるもの、其徒導公儀公等と共に之を始め、遼の通理大師に至る迄、尙ほ未だ止ま

なかつた。道宗皇帝以前には共に一百八十七快、道宗辨する新の大牌は一百八十片、通理大師辨する所の小碑は四千八十片といふ。此等の石經は何れも山腹の巖石を穿ちて土室を作り、其内に收められ、洞門には溶鐵を灌ぎ、上方には石櫺を以て之を隔て、宛も格子戸の如くし、外部よりは之を望み得るも、内部には何人も入ることを得ざらした。今日見る所では其内部の石の或は臥れ或は立つものもある。是は果して昔から斯く亂雜不秩序となつて居たものか、甚だ疑はしい。或は棚を造り其上に載せたもの、其後棚の朽敗して自然に斯の如くなつたか、或は後世何人か私かに之を取出したのであるかも知れぬ。現に其洞窟の頂上に巖石の破れて穴をなして居るものもあり、石經の斷片の諸處に藏せらるゝもの、あるのを見ても如何かして之を取出したものの、あつたことは疑ない。其一室の開い入るを得るものは之を、雷音洞

といふ。洞は廣濶約七間に四間位はあらうと思はれるが、中央には壇があり、壇の四隅には石柱あり之に佛名と佛像とを彫刻してある、其書其像、明かに隋代のものらしい、極めて精巧美妙である。四壁には三層或は四層、經石を嵌入し、法華、勝蔓、金剛等の諸經を刻する。石には大小あるが、總べて一百四十六枚、石面は何れも磨して鏡の如く、字畫端好、彫刊亦一點一劃を苟くもせず、宛も我邦の所謂和同經を見るが如く人をして低徊去るに忍びざらしむるものである。是れ皆靜琬法師の刻する所といふ。每字大サ約經一寸、四方細針を施してある。尙ほ此七洞一穴以外にも經碑は甚だ多い、殊に金剛經の如きは三本もある、是れは一石に一經を刻したもので、其書亦決して法華經等に譲らぬ。

房山石經は元來一切經を刻したのであるといふが、今果して幾何の經典が存して居るか、其石室

内に鎖されたものに就いては何人も之を検索し得ないものであるから判らぬ。又當時一切經といへば恐らく開元錄によつて一千七十六部五千四十八卷であつたらう。が今遼の時續刻する所を併せ考ふるも勿論雷音洞内の經石は何れも片面に到してあるが、石室内のものは兩面に刻してあるものらしい、がそれにしても經石の數は經卷の數に比し尙ほ大に足らざるものがあるが如く思はれる。之を以て想像するに一切經と稱しても實は一切經全部ではなく、少くとも其主なるものを選んで刻したのであらう。拓本の如きも雷音洞に存するものは多少之あり、又何時でも之を打し得るが、石室内のものは到底之を打するを得ない。如何かして一度其石室を開き、其内容を調査し、併せて其拓本を取り得たならば、學海を裨益すること又甚だ大なるものがあるであらう。今後歲月を經過するに従つて、其失ふ所も多かるべく、尙ほ一層嚴格に保

存の方法をも講じなければならぬこゝと思ふ。支那の他地方にも經石の存せぬことはないが、今は何れも殘缺で、多くも數十石に過ぎぬ、房山の如く累々として存するものは他に其類を見ないのである。是れ實に大同の靈像と共に天下の至寶といはなければならぬ。(未完)

君府の思ひ出

文學博士 坂 口 昂

一 私の土耳其帽

専門の研究を離れないで簡易平明を旨とする「雜纂欄」が出来たから何か書けとのこと、私は會遊のレヴンテに關する自分の古昔感のうちから目下の大戦亂殊にその戦後の一重要問題の中心たるコンスタンチノーブルの思ひ出の糸を手繰り出すことにした。しかし否な因て、私は先づ自分の

土耳其帽の懷古から始めるの自由を許して貰ひたい。

私はトランクの底ふかく八年このかた今も尙ほ一つの——自分だけの——珍寶が秘藏してある。それは、一九〇九年の春西航途上、私の船が暑苦しい退屈な印度洋航海を了へてポートサイドに寄港し、涼しい多年夢寐の間にあこがれて居つたレヴンテの風に吹かれながら、その十日ばかり前に「青年土耳其」の第二革命が破裂して終にスルタンアブヅル、ハミツドの廢立を斷行した(四月二日)の新聞に始めて接した時、偶船の甲板に來たアラブの賣兒から自分の歴史感がそゝる好奇心に惹かれて購ふた一個のフェツツであるのである。その價僅かに一志。

やがてレセツプス銅像の下を船出して、クレタの島蔭のあたり通過の一夕、つれづれ慰むる内外人聯合のファンシ・ボールの催しに、一つは藝無